

シンポジウム

フットボール学会から体育方法専門分科会へ望むこと

布目 寛幸¹⁾

中京大学で開かれた日本体育学会の折に、体育方法専門分科会（以下、体育方法）に期待する内容や方向性についてフットボール学会から意見を述べるというシンポジウムの依頼を受け、よいチャンスだと思い講演を積極的に引き受けることにした。なぜなら、かねがねフットボール学会で発表される研究内容は、非常に体育方法的であると感じてきたらである。つまり、体育方法の抱える課題を考えるということは、そのままフットボール学会の持つ課題を考えることになるからである。

フットボール学会の沿革

現在のフットボール学会を語る上で欠くことができないのは、その前身にあたるサッカー医・科学研究会であろう。同研究会は、1980年より日本サッカー協会の主催で開催されており、一年ごとに医学委員会と科学委員会が交互に持ち回りで開催されてきた（だから医・科学研究会と呼ばれる）。同研究会を著者が知ったのは、大学に職を得た直後の1990年代後半だったと記憶している。当時は、例年1月の上旬に開かれていたため、研究発表をすると決めると正月がつぶれてしまうというなんとも傍迷惑な研究会であったが、サッカーに関する研究の受け皿としての役割を20年以上果たしてきたこともあり、権威のある研究会だという思いで参加を重ねてきた。

ところが回を重ねると、最初は分からなかったアラがいろいろと見えてくるものである。この研究会は、奇しくも日韓共催のサッカーW杯を控えた2002年春に23回の歴史に終止符を打つ（打たれる？）のだが、冷静に当時を思い返してみると、そうなくても仕方がないと思える面も多々あったと感じざるを得ない。とりわけ、研究会晩年の運営はひどいもので、前日にならないとプログラムが分からないなどは日常茶飯事で、ワークショップ直前の休み時間にワークショップの講演者を決める様子を目にした時は、わが目を疑っ

たものである。

研究会のテーマ（サッカー）に強い魅力を感じながらも、まるで準備ができていない運営と、一連の研究にみられる科学研究としての少なくない欠点に「研究者」として違和感を抱いていたことを今でもよく記憶している。ひょんなことから研究会の傍聴記を依頼された際には、これまでに感じてきた一連の不満を正直に述べさせていただいた。無論、この傍聴記は日の目をみることなく闇に葬られたようである。

なにはともあれ、このようにしてフットボール学会の前身であるサッカー医・科学研究会とサッカー協会内の科学委員会は、半ば自滅するように消滅した。つまり、この時点で日本におけるサッカーに関する研究の受け皿がなくなってしまったのである。

一方、国外に目を移してみると、故Tom Reilly教授を中心としたグループがWorld Congress on Science & Footballという国際学会を開催していた。4年おきに開催されるこの学会には、多くの日本の研究者が参加していた（国別に見ると、常に上から数えて2、3番目に参加者数が多い国だったと記憶している）。サッカーを研究する日本人研究者の数は世界的に見ても多いのに、国内ではその受け皿が消滅してしまうという非常に不思議な状態となっていた。このような時に、2007年の国際学会を招致しないかという話が持ち上がった。確かに国内事情を知らない者がみれば、日本はサッカーの研究が極めて盛んな国であるとみられて当然である。大東文化大のグループが中心となり、2003年ポルトガル大会において次のホストへ立候補するための準備が進められた。当時著者は西オーストラリア大にサバティカル中で残念ながらポルトガル大会に行っても実際に招致へのプレゼンを行うなどの活動はできなかった。その後、招致に関しては万全の準備をしてきたトルコに完敗したというニュースを知ることとなった。

しかしながら、これを契機に国際学会のホストになれるような独立した学会組織を立ち上げようとする機

1) 日本フットボール学会副会長／名古屋大学

運が高まり、2003年9月25日に独立した学会組織として日本フットボール学会が設立され、同年熊本で行われた日本体育学会において設立のシンポジウムが開かれた。設立にあたっては国際学会に倣い、サッカーのみならず全てのフットボールコードを対象とすることとした。現在、会員数は343名（講演当時）、英文学術誌（今年からは和文投稿も受け付けを開始）および和文雑誌（体育の科学がモデル）を発行し、年一回の学会大会を開催するほか、サッカー協会、ラグビー協会のブラッシュアップ研修や国際学会招致に関する活動を行っている。そのかいあって2007年、トルコ大会には著者をはじめとした招致団を結成し、念願の国際学会の招致に成功（図1を参照）した。ところが、2011年1月現在の日本人研究者の発表申し込みは、まだ数えるほどで、「当初の目標はどこに行った？」と著者に愚痴をこぼされる大学院生の被害者が日増しに増えている。

講演では、フットボール学会の設立に関わるエピソードを映画「スターウォーズ」の一連のシリーズに例えてみた。つまり、ジェダイ（正義の騎士）の全盛からその滅亡までも描いたエピソードⅠ～Ⅲはサッカー医・科学研究会、生き残ったジェダイがその復興をかけるエピソードⅣ～Ⅵはフットボール学会というわけである。スターウォーズにはエピソードⅥ以降の物語はないので、それ以降の物語はフットボール学会自体が描かねばならない。果たして？フットボール学会は発展していくのか？あるいはサッカー医・科学研究会がそうであったように衰退の一途をたどるのであろうか？国際学会以後の学会の在り方が問われるところである。



図1 トルコでの学会招致に成功し、組織委員会からボールを託される大橋二郎日本フットボール学会会長（当時）。

フットボールに科学は必要なのか？

先のW杯南アフリカにおいて、日本代表は試合会場が高地になることから、事前合宿も含めて高地順化の専門家を帯同させている。これはまぎれもないスポーツ科学の成果で、日本代表のパフォーマンスのいくばくかを説明するものだろう。しかしながら、その人選が日本フットボール学会に一任されたという事実は全くなく、その専門家も日本フットボール学会会員ではない。つまり、残念ながら日本フットボール学会は、今回の運動生理学的な課題に関して日本サッカー協会から全く“アテ”にされていないということである。この点は、我々日本フットボール学会が真摯に反省しなければならない点である。近い将来、同じような状況が起こった時に、日本フットボール学会によって何がしかの貢献ができた時こそ、胸を張って「我々はフットボールの科学を研究する学会である」と言えるのだろう。

W杯におけるもうひとつのトピックが、賛否両論を巻き起こしたボール「ジャブラニ」であった。このボールの特性を生かした無回転フリーキックが脚光を浴びるにつれて、その空気力学的なメカニズムや無回転ボールの蹴り方に関するメディアの注目が集まった。奇しくも日本フットボール学会会長である浅井と著者を含めた何人かの学会会員が各メディアに登場することとなった。著者に限れば、たまたま本田選手が名古屋グランパスに在籍中に撮らせてもらった無回転フリーキックのデータが役に立ったのは幸いだったが、そのフリーキックが決まった直後に何本も電話がかかってきたのには閉口した（著者は渡欧中で真夜中の2時ごろにかかってきた）。いずれにしても、客観的に見て日本フットボール学会が科学情報の発信源として機能していることは確かなようである。

メリットとデメリット

ここで独立した学会となったメリットとデメリットを考えてみたい。デメリットは当然のことながら日本サッカー協会との繋がりが途絶えたことにある。それは資金的な補助の消滅を意味している。また、代表チームなどで何か測定したいようなことがあったとしても、日本フットボール学会としては何らの便宜を図ることができなくなって点も大きいと感じる（これまでどの程度便宜を図ってもらっていたかは不明だが…）。

一方、最大のメリットとしては、独立した学会として日本サッカー協会や関連のスポンサーの意向に左右されない研究活動ができる点であろう。つまり、純粋に科学的な観点から「良いものは良い、悪いものは悪い」と意見をいうことができる点である。当然だが、この部分が不自由になると「学会」としての体裁を保てなくなると著者は考えている。また、会員の選挙で選ばれた理事が民主的な学会運営をするため、前述したようなお粗末な学会運営ができないという点もメリットと考えるべきだろう。ちなみに、このような学会組織を持つ国はほかになく、日本フットボール学会は、世界で唯一のフットボールを科学する学会組織である。

フットボール学会のオリジナリティーとは？

第7日本フットボール学会のプログラムから、その内容を分類してみた。やはり多いのがゲーム分析で(14演題)、これは他の競技に特化した学会も同様であると考えられる。フットボール競技の様々な特徴を明らかにするという点では、このゲーム分析が最も多いという点は納得できる部分である。次にバイオメカニクス(11演題)、体育社会学(8演題)と続くが、これは著者を含めた理事の専門分野の影響が色濃く反映されているように感じる。

さて、この分類から分かることはなんだろうか？例えば、これらの演題が日本フットボール学会ではなく日本体育学会に提出されたとしたら、どの分科会に分類されるのだろうかと考えてみると日本フットボール学会の特徴が自ずと浮かび上がってくるのである。現状では日本フットボール学会は極めて体育方法分科会に近い位置にある。大雑把にいうならば、違いはゲーム分析の対象がフットボールか、そうでないかということだといってもいいだろう。

体育方法の現状

一方、体育方法の現状はどうだろうか？わざわざ著者を招いて講演を企画するほどなので、何か良くない問題を抱えていることを想像するのはそれほど難しくない。そして冒頭にも述べたが、それは日本フットボール学会の抱える問題とおそらくは同質なのである。

体育方法の第61回日本体育学会における演題数は96を数え、全ての専門分科会の中でも最多の演題数を誇っている。演題を眺めていて気になる点は、体育方

法であるはずなのに演題にやたらと「バイオメカニクス」の文字が多いのである。テーマも中々興味深い。「中学生のハードル走指導に生かすバイオメカニクス」「バイオメカニクスからみた空手道競技の評価基準に関する検討—基本動作における「動作のキレ」に着目して—」など、好意的に見れば、これまで主観的な評価を基準としてきたフィールドにバイオメカニクスから客観的な評価基準を導入しようとする先進的な研究のように見ることができる。一方、批判的にみることも可能で、バイオメカニクス専門分科会では、データやその処理の不備を指摘されるのでそのような事態を避けたい、あるいは、本当はバイオメカニクスで発表したいが、今回は体育方法でお茶を濁しておこうかという意図が見え隠れするのである。

忌憚なく意見を述べさせてもらえば、この手の研究発表には、これまで何度もがっかりさせられてきており、これは良いという研究には未だ出会ったことがない。指導者・実践者として素晴らしい実践フィールドと研究へのアイデアを持っていながら、それを研究としてまとめる技量に欠けていると感じるのである。例えば著者が指導の現場に立てば、おそらく指導の専門家からみればやってはいけないことのオンパレードだろう。しかしそれと同じように、研究という観点からみれば、やってはいけないことの行列に遭遇する確率が極めて高いのが、体育方法で発表される「バイオメカニクス」なのである。残念なことに、優れた実践家であることと優れた研究者であることの間には明確なトレードオフ関係があるらしく、これらを両立した研究を見つけ出すことは至難の業である。これはとりもなおさず、日本フットボール学会が抱える問題ともよく似ている。日本フットボール学会では通用しても、他の専門分科会(例えばバイオメカニクス)では発表できない、あるいは当の本人が発表したくない研究が散見されるのである。

ではどうしたらいいのか？「もう少し勉強しましょう」というアドバイスが有効なのは、大学院生に限られるだろう。日々、指導・実践に忙しい教員にそのような時間的な余裕はないはずである。最も効果的な解決策は、研究者との共同研究であろう。つまり、自分にはない点をお互いに補い合うのである。ここで注意しておきたいのが、パートナーとして選ぶ研究者を「身近にいるから」「後輩だから」「先輩だから」「友達だから」という基準で選ばないことである。よくバイオメカニクスの研究者は、「肘の角度を何度で投げろ」「膝の角度は何度で飛べ」と難しいことばかりいって

指導が全く分かっていないとお叱りをうけるが、著者が知る限り、きちんとバイオメカニクスを学びそれをよく理解している方々は、このようなことを決して言わない。なぜならば、バイオメカニクスの算出される力学的な変量が、ヒトの感覚にどの程度近くて、またどの程度食い違っているかを理解しているからである。これらを理解したうえで、指導上有効な言葉かけやアドバイスを指導者とともに考えましょうという態度ではない研究者とは一緒に仕事をすべきではないと断言してもよい。

もちろん、自然科学が持つ本質的な限界も知る必要がある。ここでは話を簡単にするために料理に例えてみたいと思う。自然科学が我々に提供するものは、いくなればおいしい料理にはどのような味付けがなされていて、その成分がコレコレで、まずい料理には含まれないナニナニが含まれていますよ、といったことである。これはこれで参考になるが、美味しい料理を作ろうと張り切っている方には、これでは不十分である。例えばおいしいチャーハンには卵と米と油がこのような割合で含まれていますよ、と言われてもおいしいチャーハンはできない。おいしいチャーハンの基本はその調理の順番にあるとされている。フライパンで熱した油に卵を溶いて両者の混ざり合った状態を作り出し、それを素早く米全体に絡めなければあのパラパラした食感のおいしいチャーハンではできない（料理に詳しい方はすでにご存じだとは思いますが）。ひとつ順番を間違えるだけでも全く別のものになってしまうのである。自然科学はその順番を説明するのは得意ではない。しかしながら、その順番こそが秘訣なのである。

スポーツに話を戻そう、指導者・実践者は日々の練習の中でこの順番を経験値として蓄積している。一方、長期的にあるチームに関わることが難しい研究者は選手の縦断的な変化を知ることが難しい。現在、自然科学の分野では、横断的なデータの蓄積はある程度あるものの、縦断的なデータの蓄積に関しては（例え短期的な変化であっても）不十分と言わざるを得ない。ここにこそ指導者・実践者と研究者が共に取り組むべき課題があると感じている。

提言

これらを踏まえた上で、体育方法に望むこととしていくつかの提言をしたい。まずは、実践現場における優れた「コツ」や、その効果を主観的な評価や経験知にとどめるのではなく、客観的な視点から記述する

ことである。いくなれば自分の子どもが一番かわいいからの脱却である。善し悪しの判断基準を他に委ねた上で、その基準にかなった知見を集積していくことは体育方法における貴重な財産となるはずである。次は、個別の事例に関する知見の集積である。世間一般には、自然科学では検証不能な課題が多く存在する。例えば、スポーツをすると優れた人格者になるといったような類のものである（我々はそう信じているが、これを客観的に証明することは難しい）。このような課題に対して有効な方法が、事例の蓄積である。社会全体に対して優れた人材をスポーツ界から数多く輩出することで、前述の課題に対して間接的な証明を行うことができる（政治家に転向した方々をみていると望み薄だが）、できることならば成功例だけではなく、失敗例の報告にも期待したい（こちらの方が役に立つ場合が多いだろう）。最後に、前述したような、実践者の持つ優れたフィールドと研究者の持つ優れた研究手法との融合である。この場合も専門分野や学閥・派閥を超えて行うべきであると考えられる。

年頭に曹洞宗大本山永平寺に初詣した際に「修せざれば現れず」と題した訓話をみつけた。研究と実践の関係を象徴するようで、「禅」を「体育・スポーツ」に置き換えてもおそらく同じことがいえるだろうと感銘をうけたので紹介したい。

修せざれば現れず

「知る」ということと

「わかる」こととはちがうのです

知ってはいても実行されなければわかったことになりません

薬の効能書を読んだだけでは病気は治りません

禅も実行してはじめてわかることなのです

ひょっとするとこれまでの自然科学の研究というのは「知る」ことに重きをおいた活動だけで「わかる」気になっていたのかもしれない。しかしながら、本当に「わかる」ためには、その「知」を実践の場とリンクさせることが必要不可欠であるのは論を待たない。

最後に

講演前は、講演後にどのような質問が出るかを密かに期待していた。著者の狭量な科学観では、計り知れない奥深いものが体育方法の根底にあって、それを自然科学の範疇に納めることはできないのではないかと

いう不安（期待？）があったためである。もし、そのような概念が提示されたならば、じっくりとそれについて議論してみたいと考えていたからである。結論か

ら言うと、その期待は見事に裏切られてしまった。返す返すもその点が残念でならない。